

中ッ原A遺跡

— 平成4年度県営圃場整備事業掘地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1993

茅野市教育委員会

序 文

中ッ原A遺跡はこの度県営圃場整備事業掘地区に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものであります。

発掘調査では縄文時代前期初頭、後期前半、平安時代後半の竪穴住居址と、縄文時代後期の方形柱穴列、土坑群が検出され、昭和25年に宮坂英弼氏が調査をした結果を裏付ける成果が得られ、調査区外にも遺跡が広がる可能性が判明したことは大きな収穫でした。

今後広域に亘る発掘調査により縄文時代の資料が得られることでしょうが、遺跡相互の関係を復原するためにも中ッ原A遺跡のような立地状況を持つ遺跡群は重要であり、今後調査される隣接する関係にある立石遺跡の成果や、昨年度調査された城遺跡、水尻遺跡、珍部坂遺跡などの成果も含めて縄文時代の生活領域について検討しなければなりません。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会等各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成5年2月

茅野市教育委員会
委員長 両角昭二

目 次

序 文	第III章 遺構と遺物	5
第I章 遺跡の環境	第1節 検出された遺構	5
第1節 遺跡の位置と地理的環境	第2節 発掘された遺物	14
第2節 遺跡の基本的な層序	第IV章 結 語	14
第II章 調査経緯		
第1節 発掘調査に至るまでの経過		2
第2節 調査の方法と経過		4

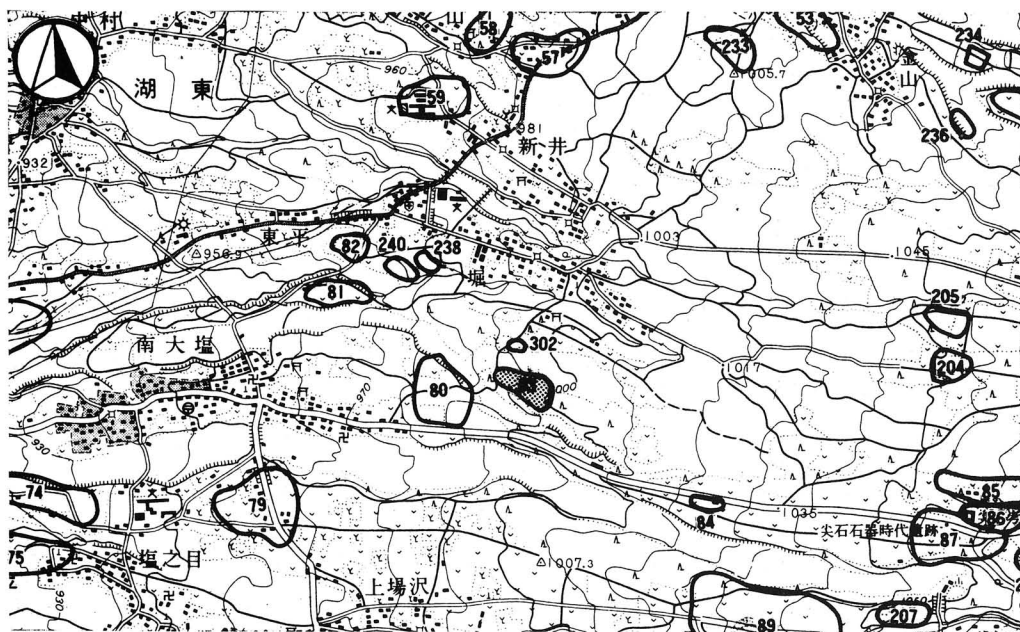
第 I 章 遺跡の環境

第 1 節 遺跡の位置と地理的環境

遺跡の位置 中ッ原A遺跡は茅野市豊平4580-2他に所在する。市街地の北東約6kmに位置し、ちょうど堀地区の南側、南大塩地区の北側で、両地区に挟まれた位置にある。

遺跡の立地 遺跡は八ヶ岳の火山活動により形成された尾根状台地に立地している。遺跡の立地する台地は、堀地区から山寺地区、長倉地区にかけて延びる長い尾根状台地に隣接する。この尾根上台地は、上部に位置する尖石遺跡や、与助尾根遺跡の位置する台地の一部が分岐したもので、幅の狭い長細い形状を呈しているが、部分的に広がり小規模な入り組み谷を持つ部分もある。

台地の上部は起伏が少なく、先端に向かい緩やかな傾斜を持っている。調査区付近の標高は989mである。南側、北側の斜面は急斜面となり沖積地面と接しており、八ヶ岳西南山麓台地特有の切り立った崖状で、調査区付近では河川による侵食が著しくが進み、台地の平坦面のかなりの部分が侵食されたような状態を呈しており、地図上に見られる平坦な部分は少なかった。台地上と沖積地面との比高は9mを測り調査区付近では、台地が切り立った孤立丘陵状を呈する。



第 1 図 中ッ原A遺跡の位置 (1/25,000)

遺跡は山林として残っており、地形や自然景観の旧状を把握するには絶好の条件にあった。遺跡全体が山林であるために遺跡範囲を限定するまでには至っていないが、地形的に見て今回の圃場整備事業計画地外の上部に平坦な広い台地が続いており、地形等の状況を考えると遺跡の

主体部はこの部分に展開するものかと思われる。

遺物の散布状況 台地全体が山林に覆われているために、遺物の散布状況については、把握することはできていなかったが、昭和24年に開設された台地を南北に横断する農道の断面より、竪穴住居址が露出しており、昭和25年に宮坂英弉氏によって実施された発掘調査により、配石遺構が検出されている。その時の記録によると、地表下40cmに東西の幅1.5m、南北8.7mの範囲に河原石を配した配石遺構が検出されている。この配石の南東隅に鉄平石を組んだ方形の石囲い炉が検出され、敷石住居址と思われ、付近より縄文後期の堀ノ内式の土器片が検出されている。この調査の成果により、縄文後期の遺跡であることが判明したが、その広がりまでについては確認されてはいなかった。

中ッ原A遺跡の周辺には数箇所の遺跡が点在している。北側の谷を隔てて中ッ原B遺跡、南側の谷を隔てて立石遺跡が一つの群を形成し、昨年度調査された珍部坂A・B遺跡、水尻遺跡、城遺跡の遺跡群がやや離れて位置する。遺跡規模の差はあるが、遺跡の立地する周辺は遺跡の集中箇所として捉えることができ縄文時代の遺跡群として捉えることができ、遺跡の相互関係を調査するためには重要な地域である。

第2節 遺跡の基本的な層序

本遺跡の基本的層序は、台地頂部に南から北方向へちょうど台地を横断するように設定したトレンチにより行った。それによると遺跡の基本的層序は下記のとおりである。

- I層 黒作土 現在の表土で、色調は黒色で割合粘性にとんでいる。ソフトな感触である。
- II層 漆黒色土 色調はI層より黒色味が強く割合しまっている。堆積は割合厚い。地表より松等の根が入り込んでおり攪乱が本層に及んでいる。
- III層 黄褐色土 ローム粒子が大きめになりその量も多くなる。漸移的な土層であり、南側の斜面部近くでは基盤層のパミスが混入する。
- IV層 ソフトローム

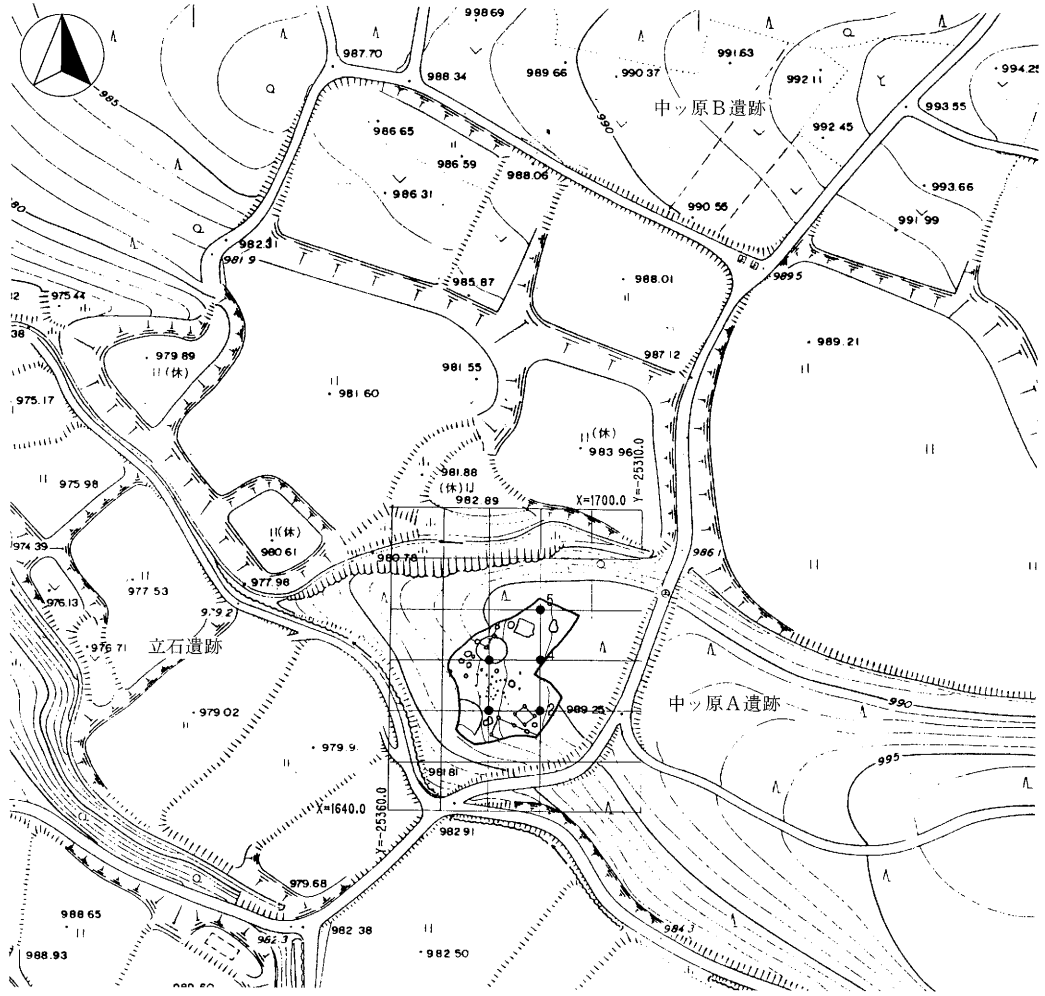
遺物包含層はII層が該当するもので、台地斜面部では漆黒色土の次にパミスを混入する黄褐色土が薄く堆積しており、ソフトロームはあまり見られず基盤層に至る。

第II章 調査経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

平成3年度から開始された県営圃場整備事業堀地区は、堀地区の南側の台地先端から事業が進行し、平成4年度には堀地区集落の南側一帯の台地、谷部が対象地区として事業が計画されてい

た。この実施地区内には「中ッ原遺跡」と呼ばれる縄文時代中期・後期の遺跡が位置していた。この遺跡の範囲を確認するために実踏を行った。その際谷を隔てて北側に緩やかな斜面を持つ台地がみられ、表面採集を実施し、その結果小規模な縄文時代の遺物が発見され、中ッ原の小字名を遺跡名としたが、既存の「中ッ原遺跡」と区別するため、既存のものをA、新発見のものをBとした。



第2図 中ッ原A遺跡の地形と発掘区 (1/1,500)

本遺跡の保護について平成4年3月26日、長野県教育委員会文化課、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室により、平成4年度農業基盤整備に伴う埋蔵文化財保護についての協議が行われ、その協議結果として平成4年4月2日付2教文第7-81-11号、県営ほ場整備事業（堀地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。それによると遺跡の保護については、事業地区内にかかる280㎡以上を発掘調査し、記録保存をはかるというものであった。この計画を受け茅野市教育委員

会では平成4年度文化財関係補助事業計画を上げ事業に備えた。

平成4年5月11日付4諏地土第号外埋蔵文化財発掘通知を達達し、補助事業の内定を待ち事業着手という段取りであったが、圃場事業の工程より事前着手の必要性が生じた。そのために5月11日付で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託の契約を長野県諏訪地方事務所長と締結した。それによると総額916,000円(農政部局負担664,000円、文化財負担252,000円)で事業を行うこととし、5月26日付4教文第67号文化財保護事業事前着手届を提出し、6月9日より調査に入る。

第2節 調査の方法と経過

本遺跡はその規模・内容が不明で山林内に立地する遺跡であったため、調査区の設定は計画的に行えず、山林立ち木の伐採、伐根の完了地区より調査区を設定し、調査に入るという段取りとなった。そのために立ち木や、排土の関係より調査区を拡張できず、一部の遺構についてその規模の広がり把握できなかった。しかし、最終的には台地の最も平坦な部分についてはほぼ調査でき、遺跡の広がり、遺構・遺物の埋蔵状況をほぼ確認することができた。

調査区内の立ち木処理と遺跡調査はほぼ同時に並行する形で行われたために、遺跡範囲の確認を目的とした調査は、トレンチ等による計画的な調査区の設定は行えず、伐採の完了した部分より調査に入った。6月9日に隣接する中ッ原B遺跡より機材を搬入し、6月10日より重機による伐根と遺構確認作業を実施する。遺構確認作業は根の伐根による攪乱等で困難を極め、また、遺跡の立地する台地が狭いために排土処理の場の確保に苦慮した。遺構確認、遺構の掘り下げ作業は6月10日より実施され、地元作業員の協力のもとに6月26日に現場における作業を終了している。調査区全体の測定の為に公共座標の設定が行われ、 $y = -25300.0$ を基準軸とし、1～5の5点を下記のように設定した。1 $y = -25340.0$ $x = 1660.0$ 、2 $y = -25330.0$ $x = 1660.0$ 、3 $y = -25340.0$ $x = 1670.0$ 、4 $y = -25330.0$ $x = 1670.0$ 、5 $y = -25330.0$ $x = 1680.0$ 。ベンチマークは1の988.334mとした。

この調査結果にもとづき、本遺跡は縄文時代前期初頭、後期前半、平安時代後半の複合遺跡であることが確認でき、特に後期前半においては、台地の南側縁辺を中心に集落が展開することが確認でき、今回の調査区外の台地上部に遺跡が広がることが確認できた。

遺物整理、報告書作成が本格的に開始となったのは、発掘作業ができなくなる冬期に入ってからである。報告書の作成、原稿の執筆は守矢が行った。

調査組織 (事務局) 教育長 両角昭二 文化財調査室長 永田光弘 係長 鶴飼幸雄
主任 両角一夫 (調査員) 守矢昌文(現場担当) 小林深志 功刀 司 小池岳史 百瀬一郎
小林健治 (調査補助員) 牛山徳博 武居八千代 矢嶋恵美子(発掘作業協力者) 朝倉あやめ
牛山徳子 帯川しげ 北沢文字 小平ツギ 小平ヤエコ 清水みゑ 森口鈴子 吉田幸男
(遺物整理) 清水園江

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 検出された遺構

1. 遺構の概要 今回の調査に於いて本遺跡より竪穴住居址4、方形柱穴列3、土坑47、ピット群1が検出された。遺構の検出数は今回調査した堀地区の中で最も多い数である。時期別にみても縄文時代前期初頭、後期前半、平安時代の複数に亘る時期のものが検出されている。

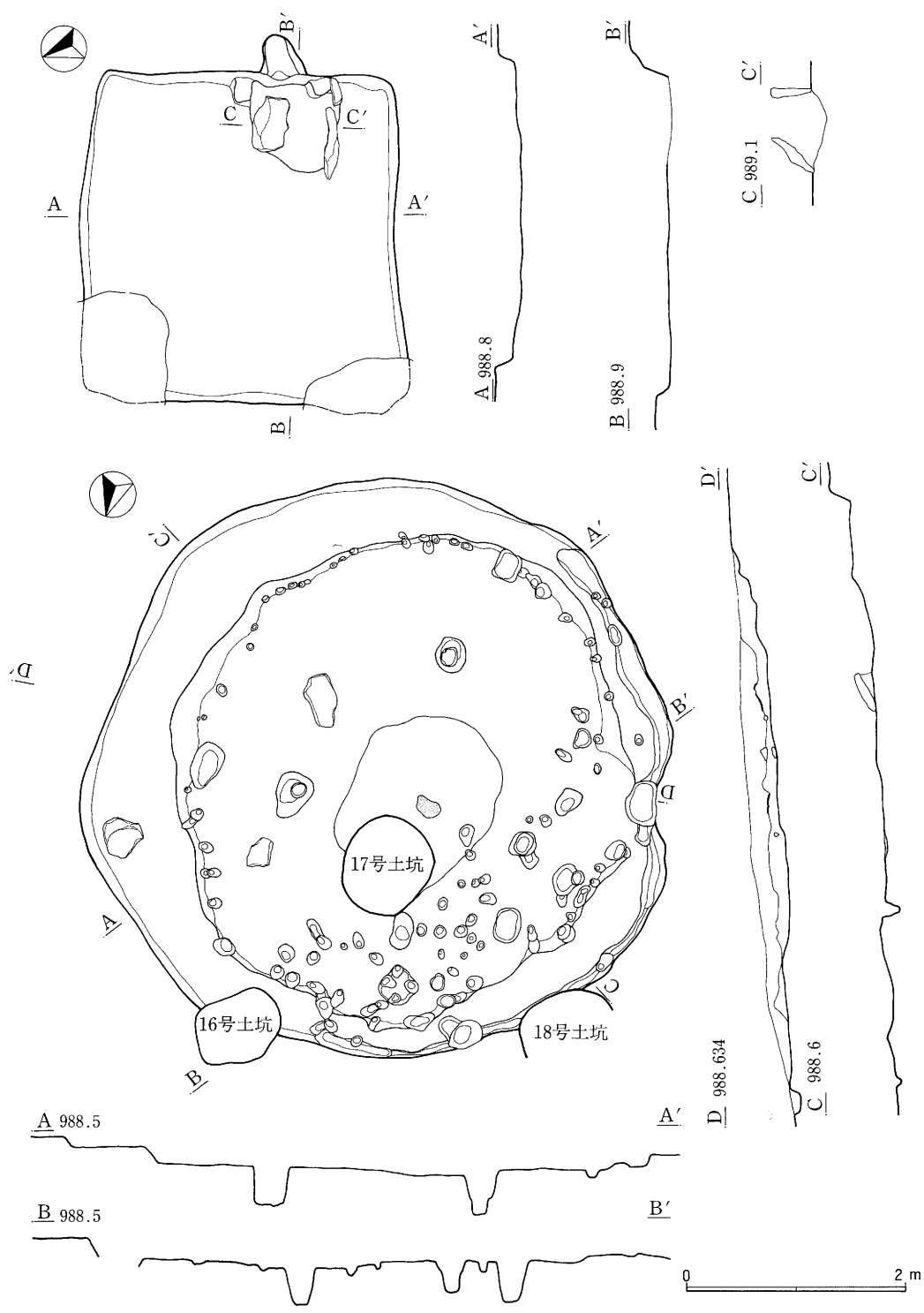
2. 竪穴住居址 竪穴住居址は3軒が検出されその内1軒が平安時代、もう2軒が縄文時代のものではあったが、縄文時代のものは同時期ではなく前期初頭と後期前半のものだった。

(平安時代) 第1号住居址(第3図) 調査区の最も台地上で平坦な部分に構築されている住居である。台地の中央部よりやや北寄りに検出された。平面形は東西方向に長軸を持つ3.0m×2.8mのやや南辺の張る方形を呈する。長軸方向はN-68°-Wを示す。壁の立上りは北、東、西側は明瞭であるが、南北側のコーナーの一部が伐根の際の攪乱により、やや不明瞭であるが、他の部分により住居址のプランを把握することができた。最も高い部分の東側で45cm前後である。床は全体的に軟弱で、凹凸が見られる。床は中央部がやや低く、壁側に向かって緩やかな傾斜を持っている。カマドは住居の長軸線上の東壁、中心軸線よりやや南側に寄った位置に検出された。カマド部分はちょうど伐根の際に攪乱され、原形を留めてはいなかったが、遺存していた袖部や、天井石と思われる扁平な礫より石組粘土カマドが構築されていたものと思われる。カマドは不整形の浅い皿状の掘り方をもち、その脇壁際と接している部分には、袖石を据えるためかと思われる袖状のロームの高まりが検出された。掘り方内には若干の焼土が認められ、天井部より落下した天井石や粘土と一緒に甕の破片が検出されている。カマドの奥壁側には煙り出しに関わるとと思われる不正形の掘り方が検出された。灰掻き穴等は検出されていない。

覆土は攪乱等により分層することができなかったが、カマド周辺に白色粘土・焼土を含む層が若干堆積してただけで、その他は割合ソフトな漆黒土が堆積していた。また、住居内の北東部分に炭化材が倒れた状態で遺存しており、この周辺を中心に炭化物の検出が著しかった。

本址よりの出土遺物は少量であった。カマドを中心に若干の土師器甕破片が検出されているが、器器を復原できるようなものはない。検出できた土師器甕が掻き目を持つもので、これらよりみて平安時代後半に帰属しよう。また、1点チャート製の石鏃が検出されている。

(縄文時代) 第2号住居址(第3図) 調査区の中央部より北西側に寄った位置に検出された住居である。住居址の北側に16号土坑、中央部に17号土坑、西側に18号土坑が重複する。全体の規模はほぼ東西方向に長軸を持つ5.42m×5.34mのほぼ円形に近いプランを呈し、長軸方向N-60°-Wを示すが、このプラン内に同心円状に重複する形で、小形円形プランの掘り方が検出され、当初他の遺構の同心円状の重複、または同心円状の拡張が考えられたが、貼り床の有無の



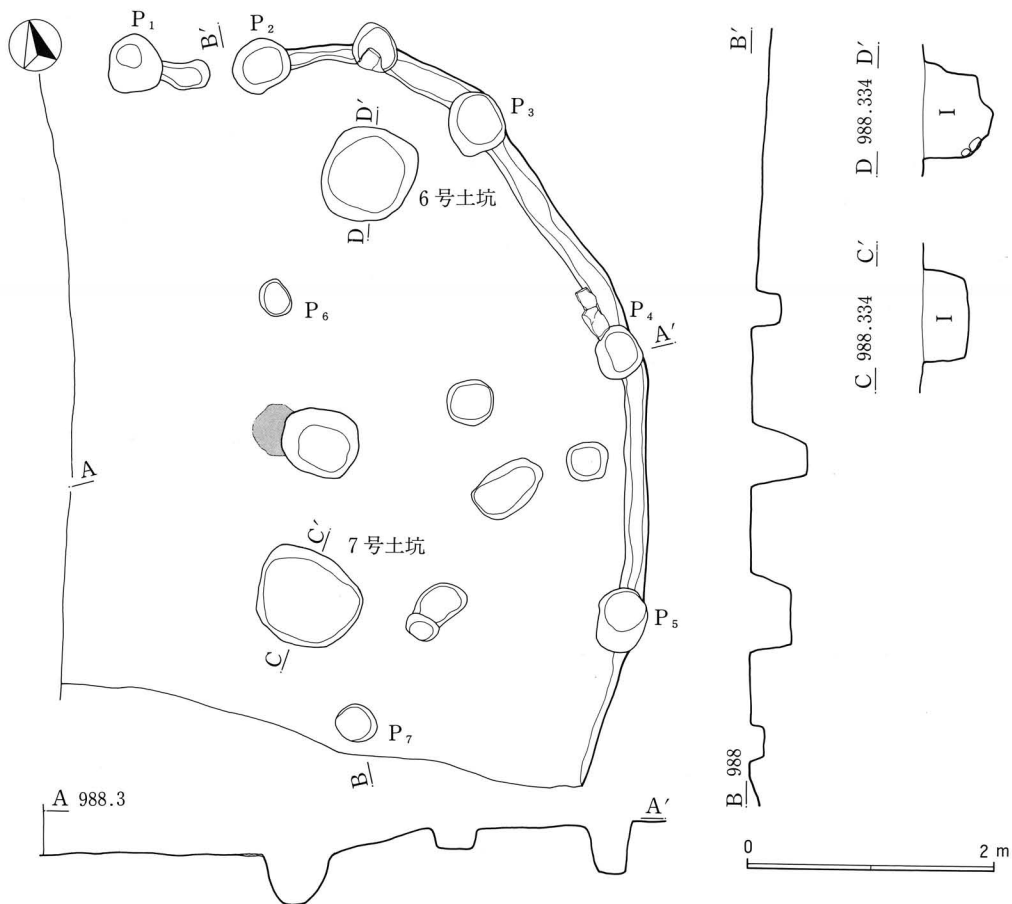
第3图 第1·2号住居址 (1/60)

問題、覆土の状況より二重構造を持つ住居址と考えられた。外側を外帯、内側を内帯と説明の都合上しておく。外帯の壁の立上りは北、東、南側は明瞭であるが、西側は地形が緩やかな傾斜を持つため流失しており、そのために検出することができなかった。最も高い部分の東側で20.5cm前後である。内帯の壁の立上りは外帯よりも緩やかで、東・北側で10cm、南側6.8cm、西側5.5cmを測った。尚、西側は他の部分に比べて、壁の立上り方が緩やかで不明瞭な部分がある。外帯の西側壁際には深さ5cm～7.5cmの不正形な周溝が巡っている。内帯びの壁際には径8cm～13cm前後の小孔がほぼ全周する形で一重に巡っている。検出された小孔は壁体構造に関わるものと思われる。柱穴は住居址の中心に近い部分に検出された $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ の4本と思われ、深さも平均43.1cm ($P_1=58.5\text{cm} \cdot P_2=36.5\text{cm} \cdot P_3=36.5\text{cm} \cdot P_4=41.0\text{cm}$)と割合深くその掘り方もしっかりしている。柱穴間の距離は P_1-P_2 1.81m、 P_2-P_3 1.7m、 P_3-P_4 1.88m、 P_4-P_1 1.58m間に検出されている。出入口部と思われる明確な位置は不明であるが、地形が西側に傾斜する点、また、この西側に柱穴が密集しておりこれらは出入口に関わった可能性も考えられ、西側出入口部を想定することができようか。支柱穴には立替え等による重複は認められなかったが、 P_1 、 P_2 の柱穴底は二重構造になっていた。支柱穴に囲まれた範囲1.6m×1.34mは深さ5cmの浅い皿状の窪みを持つ平面形状が不正楕円形を呈する掘り方を有しており、この中央部に地床炉が構築されている。この不正形な掘り方は、位置関係等より炉を中心とする内区に関わるものとして捉えられよう。このように支柱穴に囲まれた範囲(内区)範囲外(外区)が認められ、不正形な掘り方の段差により区画される。床は全体的に凹凸のあるものの割合硬く締まっているが、西側の部分がやや軟弱な傾向を示す。内区部の床は住居中央炉に向かい緩やかな傾斜を持って皿状に窪む。炉は住居の中央より長軸線上よりやや西に寄った位置に地床炉と思われる焼土範囲(23cm×16cm)が位置している。炉や支柱穴に立て替えが認められなかったことより、本址は大きな立替えはなされなかったものと考えられる。

覆土は2層に分層できた。東側の壁際よりローム粒子、パミス粒子を若干含む黒褐色土(II層)が、この層の上部に礫や土器片(第8図20)が検出された。I層はII層に比べ黒色の強い土層で、炭化物粒子や土器片を含んでおり、土層の堆積状況は自然堆積を示すものと思われる。

本址よりの出土遺物は少量であった。住居址覆土第I層を中心に若干の土器片が出土している。唯一器形を復原できるものは、II層上面に遺存していた大型破片だけである。本址より前期初頭の土器片28、混入、または重複する土坑に伴ったと思われる後期前半の土器片、凹石2、礫器1、チャート製剥片石器1、黒曜石碎片、剥片18点、総重量104.4gが出土している。本址は器形復原ができた深鉢形土器よりみて前期初頭花積下層式期の後半に帰属しよう。

第3号住居址(第4図) 調査区の南側斜面に沿った位置に確認された住居で、6号土坑、7号土坑と重複する。約半分は斜面側へ流出しており確認できなかった。また、西側は立ち木等の関係より拡張することができず、本址の全容を把握することはできなかった。遺存していた東側の壁、周溝、柱穴配列等より平面プラン、規模を推定すると、平面形はほぼ南北方向に長軸を持



第4図 第3号住居址 (1/60)

つやや不正の円形を呈しているものと考えられ、検出された炉を住居址の中央と想定するならば、その規模は直径が6m位となろう。長軸方向は柱穴配列等より考えて、南北方向 P_6P_7 かと思われ、 $N-1^\circ-E$ を示す。壁は東壁のみが遺存していた。壁の立上りは最も明瞭な部分でも4cm程度で、住居址の掘り込みは不明瞭であった。このことは地形の傾斜によるものか、または当初より掘り方を持たない平地式的な住居であったかを確認することはできなかった。壁際には割合幅の広い周溝が東側と北側の一部に巡っている。この周溝により住居のプランを把握することができた。支柱穴と思われる柱穴は、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_5$ の5本が周溝に沿う形で検出されている。これらは深さも平均39.8cm ($P_1-36.5\text{cm} \cdot P_2-33.5\text{cm} \cdot P_3-48\text{cm} \cdot P_4-42.5\text{cm} \cdot P_5-38.5\text{cm}$)と深くその掘り方もしっかりしている。また、住居址の内側に棟持ち柱となると思われる P_6, P_7 が検出されている。検出された柱穴配列より全体を想定すると、10本の柱が南北方向にやや長い10角形で配されていたと思われる。柱穴には立替えによると思われる重複はみられなかった。パミスを含む硬質ロームを直接床としているために、全体的に硬く締まっているが、部分的に硬質ローム内に含まれる軽石が露出している部分があり、床面はやや凹凸を呈する。炉は住居

の長軸線上のほぼ中央部より若干西側に寄った位置に40cm×14cmの範囲に焼土が認められ、これが地床炉となるものであろう。尚、炉は重複する他のピットに切られており、その全容を把握することはできなかった。

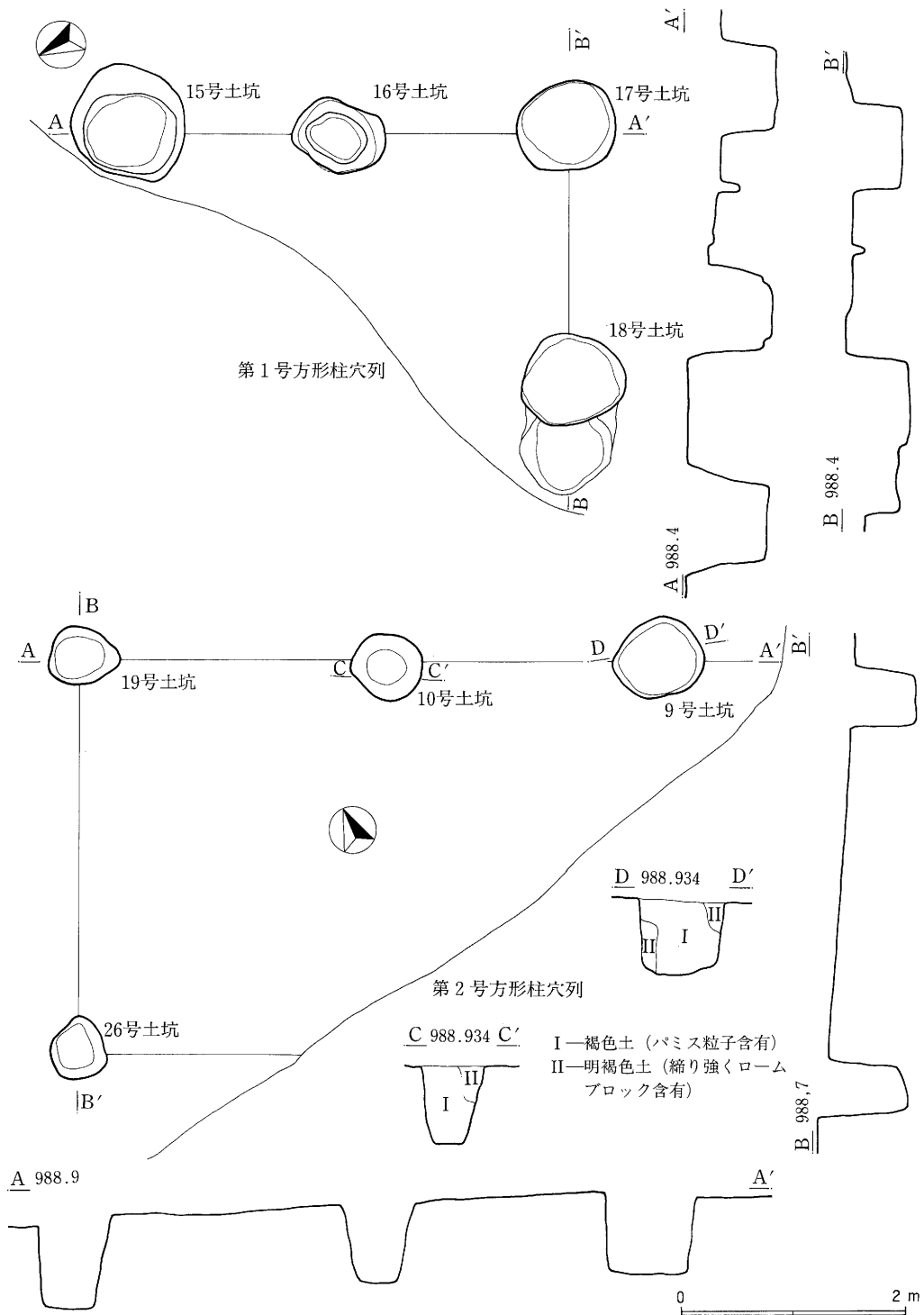
遺構検出面から住居址の床までが浅く、地形が南側に傾斜していたこと等により、覆土の堆積は薄くそれを詳細に観察することはできなかったが、割合黒色の少ないパミス、炭化物粒子を含む粘性の少ない明褐色土が堆積していた。

本址よりの出土遺物は少量であった。本址より検出された土器より見て後期前半堀之内Ⅰ式期に帰属しよう。

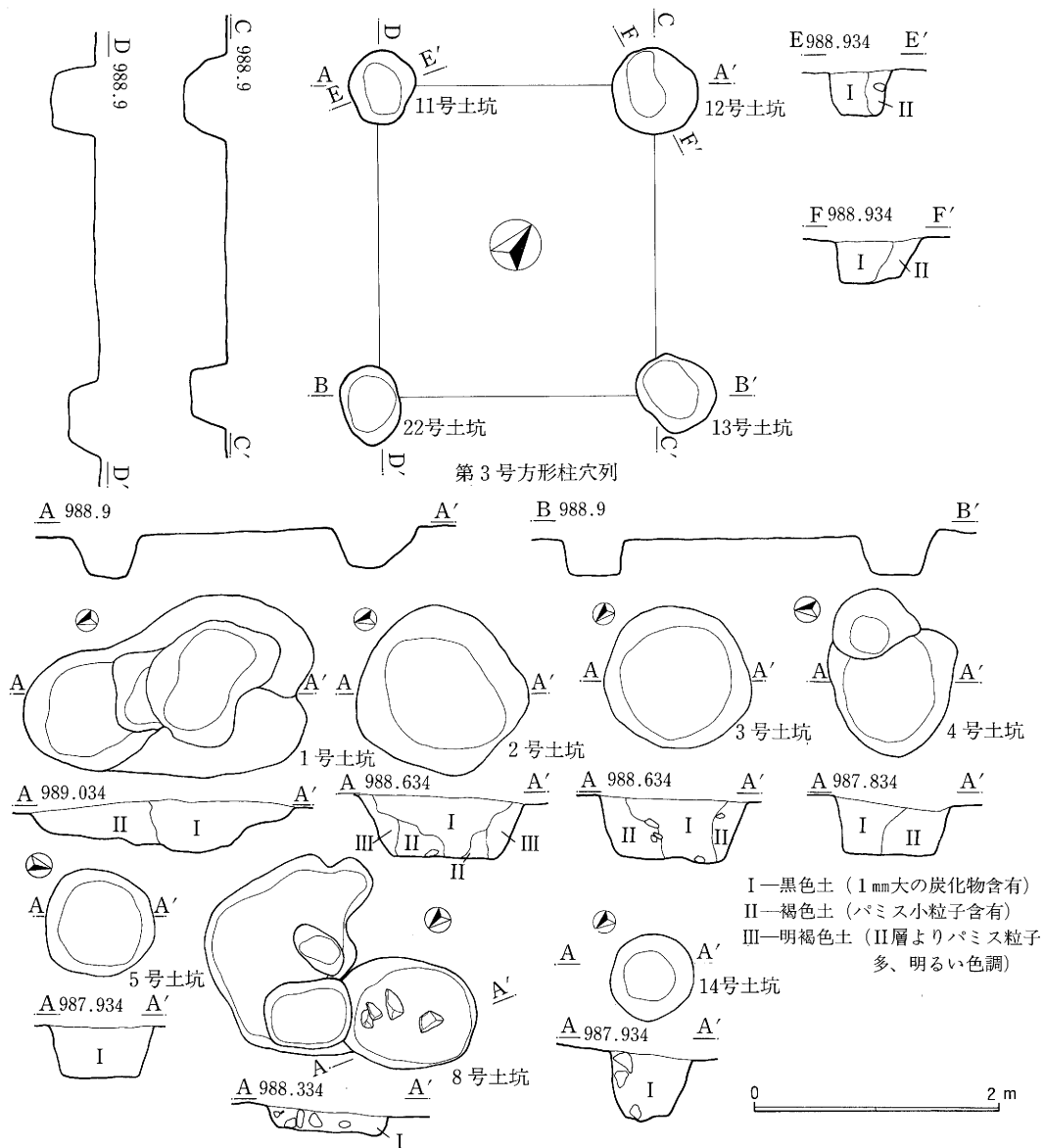
3. 方形柱穴列址 調査区の全域特に台地の縁辺に沿った形で、所謂土坑26・柱穴状のピットが40が検出された。これらの土坑の中で、積極的に柱痕と思われる土層の確認はされなかったが、褐色土が垂下するものがあり、土坑内に柱が立っていた可能性の窺えるものもあった。また、これらの土坑は、規模が同規模で直線的に並ぶものもあるため方形柱穴列となる可能性が強くその検出に努めた。

第1号方形柱穴列址（第5図） 調査区の北西側、2号住居址と重複する形で検出され、その約半分が調査区外となり、遺構の全容を把握するまでには至っていない。本址を構成する土坑は15・16・17・18号の4ヶ所で平均が径84.1cm、深さ47.5cmから72cmで割合ばらつきがあるが、検出された方形柱穴列の内で、最も掘り方のしっかりした土坑であった。深さ47.5cm（17号土坑）48cm（18号土坑）と他のものに比べて浅い土坑は、17号土坑の場合重複する2号住居址の確認面より考えると深さが77cmあることになり、18号土坑の場合も斜面部に位置しており、これらのことを勘案するとやはり深さ70cm前後が考えられ、全体的に掘り方はある程度一定であったことが考えられる。土坑の配列は、長軸方向はN-27°-Wをさす長方形の平面プランを呈するものと考えられる。直交する15号-17号土坑辺、17号-18号土坑辺割合正確に直交しており、それらより考えると本址は平面形に大きな歪みはなかったものと考えられる。しかし、土坑間の距離に差異が見られ、これが土坑の配列を若干不規則にしている。本址に直接伴うかは不明であるが、15号土坑埋土より縄文時代後期と思われる土器片1が出土している。

第2号方形柱穴列址（第5図） 調査区南側の斜面部に位置している。遺構の南側は台地の崖線となっていたために、本址の全容を把握することはできなかった。本址は9・10・19・26号土坑より構成され、土坑の配列より考えると長軸方向がN-67°-Wをさす長方形の平面プランが想定でき、土坑間の距離19号-10号（2.7m）10号-9号（2.35m）に大きな差異が認められない点などより、平面プランに大きな歪みはなかったものと思われる。本址を構成する北辺の土坑の深さは19号土坑78cm10号土坑68.5cm9号土坑71cmで、その深さはバラつきが少ない。これに対して、南辺に位置する26号土坑は深さが55cmと浅い。これは26号土坑が位置する部分が斜面に位置していることに起因するものと思われる。本址を構成する9・19号土坑より後期堀之内Ⅰ式の沈線文土器片が出土しており、後期前半に帰属するものであろう。

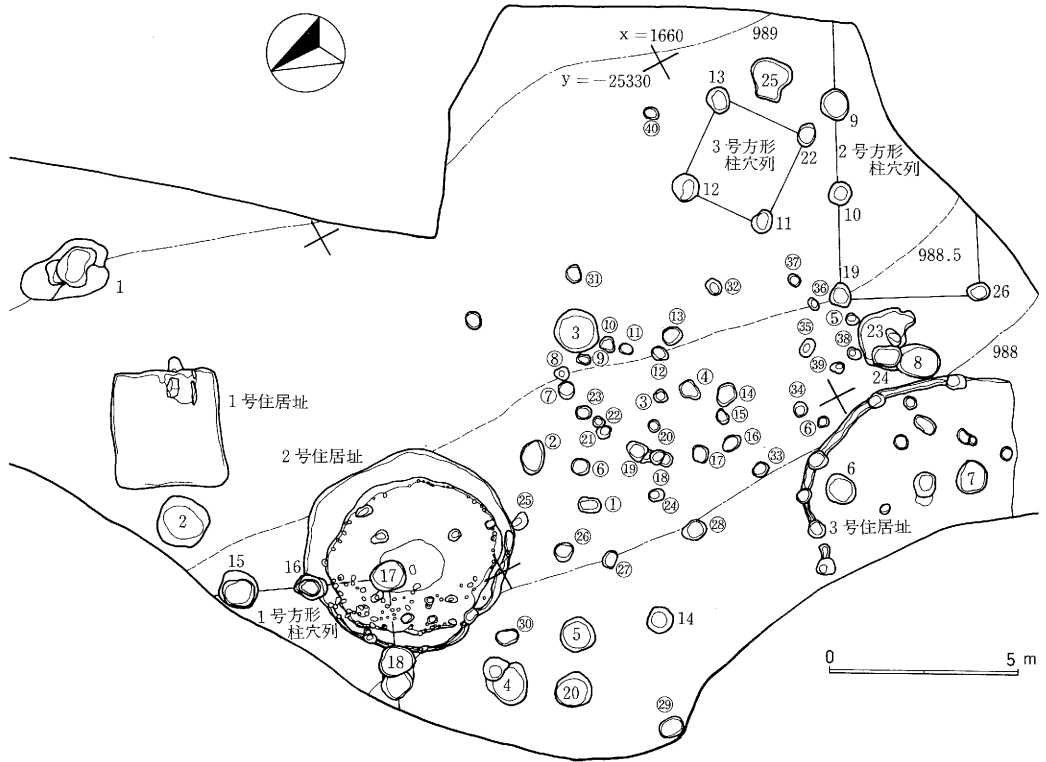


第5図 第1号・2号方形柱穴列 (1/60)



第6図 検出された方形柱穴列と土坑 (1/60)

第3号方形柱穴列址 (第6図) 調査区の最も東側に位置しており、11号・12号・13号・22号土坑の4ヶ所以外に柱穴と思われる土坑は検出されず、4ヶ所の土坑より構成される方形柱穴列と思われる。本址の平面プランは不正形な方形を呈する。北西方向から南東方向に長軸を持ち、長軸方向はN-38°-Wをさす。短辺である北西辺は2.19m、南東辺は2.43m、長辺である北東辺、南西辺共に2.6mを測り、長辺には差がないものの、短辺では24cmほど南東辺が長く平面形に影響を与えている。面積は約6㎡を測る。土坑の大きさは第2号方形地柱穴列土坑に類似している。土坑の平均的な深さは32.87cmで、北東辺に位置するものの方が南西辺のものに比べ深い傾向



第7図 遺構全体図 (1/200)

が見られる。

4. 土坑 ピット群 ローム中に掘り込みを持つ穴をその規模等により土坑、ピットに区分したが、前記した方形柱穴列址を構成する坑(土坑)は柱穴としての様相をその規模等より推察することが可能であったが、土坑の深さが浅く土層が人為的に埋め戻されたような状況で、配列に一定の法則を持たないものや、方形柱穴列址の柱穴(土坑)と規模等については同様な様相を示すが、その配列に一定性が見られないものがあつた。土坑は多くの意味が考えられ、例えば墓としての壙、貯蔵穴としての坑など様々なことが考えられる。本来ならそれぞれの意味により、区別して所見を行わなければならないと考えるが、今回得られたデータからは坑の意味にまで迫ることはできず、その為に全てを坑と幅広く捉えて考えたい。また、坑を土坑とピットに分類したが、その分類基準は坑の規模に依るところが大きい。土坑、ピットの平面形状には円形、不正円形、楕円形等が認められ、その深さも土坑では12cm~78cm、ピットでは7cm~44cmと割合数値に幅があるが、最も集中する範囲を見た場合、土坑では60cm~80cm前後のものと、100cm前後のものが、ピットでは20cm~40cm前後のものが主体を占める。

土坑(第7図) 土坑は台地頂部を中心に26基(その内9基が方形柱穴列の坑となる)の確認がなされている。これらの土坑の内遺物を出土しているものは少数で、そのほとんどが時期の不

明なものである。遺物が出土した土坑を見ると、縄文時代前期初頭のもの、後期前半のものが認められ、これらが混在する状態で検出されている。土壌の中には掘り方の貧弱なものがかかり認められたが、2号～5号土坑のように、掘り方のしっかりしたものも検出された。土坑の土層は(方形柱穴列を構成する土坑のものは除く)その状況より大別すると3種類が認められる。A—黒褐色土、褐色土、黒色土などの単一層が覆土となるもので、5号～8号・14号土坑がこれに該当する。また、土壌内に8号のように礫を含むもの(a)や、14号のようにロームブロックを含むもの(b)がある。B—覆土が2層以上に分層できるもので、壁際には褐色土、中央部には黒色土若しくは黒褐色土が堆積するもので、この群もA群と同様にa、bが認められる。B群の中には20号のように中央部黒色土を中心に炭化物が集中するものがある。

ピット群(第7図) 土坑と同様な範囲にピットが検出されている。検出当初はピット個々が、有機的に結び付くとは考えられず、むしろその状況より根等の攪乱によるものかと思われたが、平面図作成時においてこれらのピットがある程度の規則性を持ち巡るものがあることより、人為的な遺構と捉えることにした。ピット群1のピット配列は長軸方向を南西から北東に持ち、その規模は5.16m×2.82mの長楕円形を呈する。ピットの大きさは径40cm前後、深さ15cm前後の割合貧弱なものである。ピットは2ヶ所以上の重複を持つものや、また、近接する位置に他のピットがあるものが認められ、頻繁にピットの構築が行われていたことが窺える。

5. 遺構の時期別分布について 今回の調査で確認された遺構は縄文時代前期初頭、後期前半、平安時代の各時期のものである。面的に調査できた部分は少なかったが、縄文時代の遺構の分布をみた場合ある程度のまとまりを看取できた。

縄文時代前期初頭 2号住居址が単独で検出されているが、この住居址の北東側に同時期の不正形な土坑が検出されているが、遺構の分布密度は低く、遺構が重複を持たず、遺物も少ない点より大規模な前期初頭の集落が存在している可能性が低い。本遺跡と同様の前期初頭の住居址が単独または少数で、集落を構成せずに検出されている例は八ヶ岳西山麓においては余り知られてはいないが、早期末から前期前半に幅を広げると、槻木中原遺跡2・3号住居址(早期末)、与助尾根南遺跡5号住居址、丸山遺跡2号住居址、中村遺跡1号住居址、下菅沢遺跡1号住居址(前期前半)等で、これらの単独に検出される住居址について狩猟・生産活動等の為のものとも考えられるが、今回の中ッ原A遺跡の例では石器等の検出がなくその意味では特異な存在といえよう。また、同期の集落である高風呂遺跡などとは異なる性格を有する遺跡であろう。

縄文時代後期前半 本遺跡の中心をなす時期で、遺構の大半はこの時期に属する。遺構は重複関係を余り持たず、遺物より見ると後期前半でも堀之内I式期だけであり、割合短期に亘る集落として捉えることができよう。この時期の遺構は台地の南側斜面を中心に、台地の縁辺に沿った形で、ある程度の弧状を呈する。遺跡の中心は宮坂英弐氏が調査を行った、集石を中心とする範囲かと思われ、正確に地点の確定はできないが、今回の調査区より東側の農道に沿った位置が考えられ、山林として残されている部分に遺跡の主体はあるものと考えられる。本遺跡と同様に後

期前半堀之内Ⅰ式期の集落で、遺構内容も類似する遺跡が最近の発掘調査により検出されており、鴨田遺跡（敷石住居址、住居址、方形柱穴列、土坑）、稗田頭A遺跡（配石遺構、方形配列土坑、土坑）八ヶ岳の西山麓においてもある程度の後期前半の集落が展開することが確認できた。

第2節 発掘された遺物

遺物の概要 今回の調査により得られた資料は縄文時代前期初頭（2号住居址）、後期前半（3号住居址）の遺物が得られている。前期初頭の資料は八ヶ岳山麓では珍しいものである。

土器（第8図） ページ数の関係や時間的な制約よりその全てを上げて詳細な分析をすることはできないが、その概要をあげてみたい。前期初頭の土器は、大きく6類に分類できる。1類は割合厚手で、胎土に繊維を含有し、不明瞭な縄文、縄文を施文する土器群が認められる。これらの細部を見た場合2種に分けられ、所謂中道式に帰属するものと、撚りの強い縄文を原体とする縄文が羽状構成となり、裏面に刷毛状工具による擦痕が見られるものがある。これに類似する資料は高風呂遺跡41号住居址、長門町六反田遺跡に見られ、注意したい土器群である。2類は撚り糸文施文のものだが、その実態は不明である。5～6類は1～4類と異なる施文法を用いる一群で、5類が胎土に繊維を含むが、基本的には繊維を含まず中薄手のものが基本である。特に24・25は所謂中越式の範疇に入るものと思われ、1類と供伴関係が明確になったことに意義があろう。

後期前半の土器群については、堀之内Ⅰ式に帰属する深鉢型土器、特に沈線系のものが主体を占める。

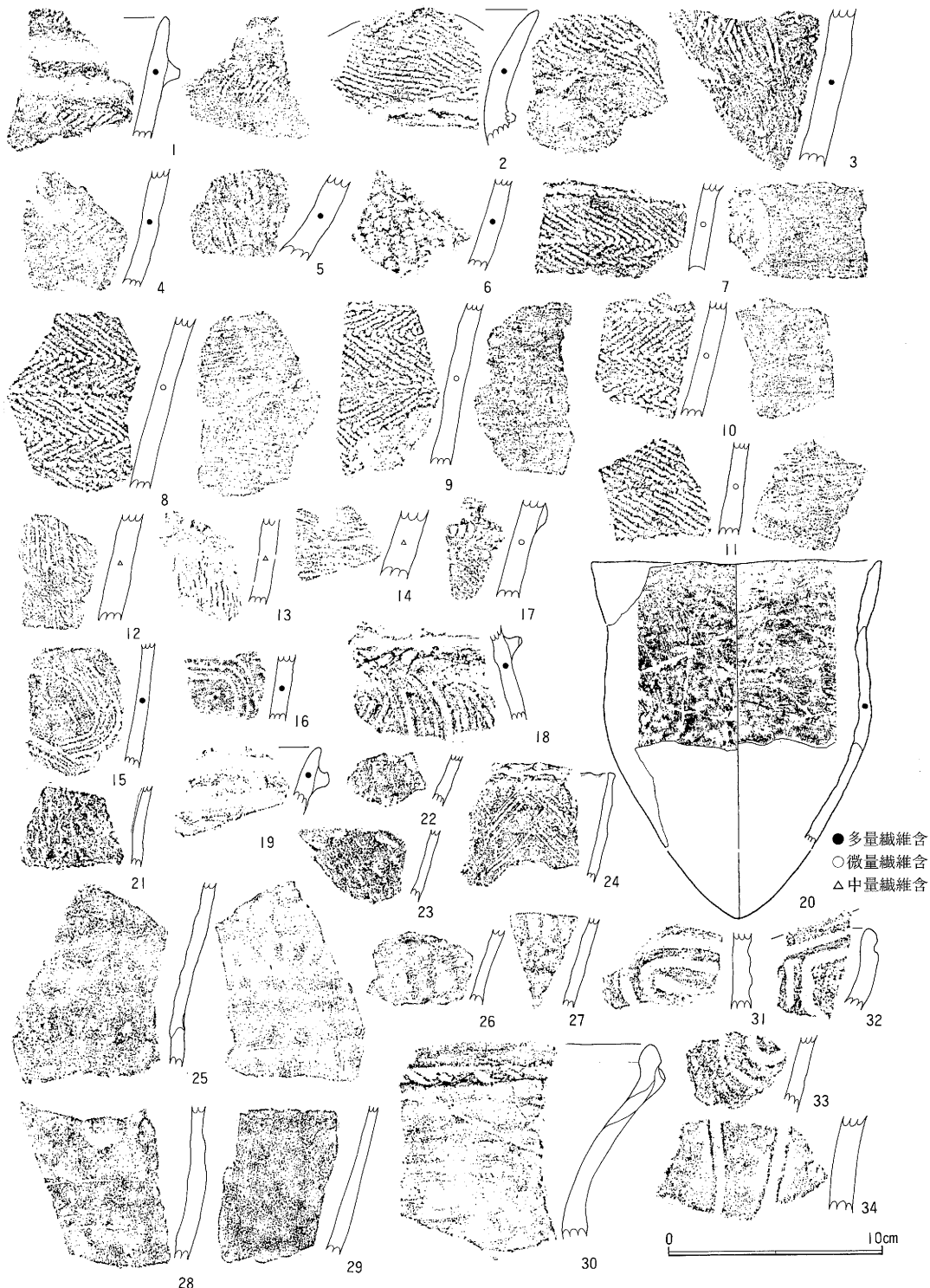
石器 今回の調査で検出された石器の点数は他の遺跡と比較して少なく、特に黒曜石の剥片、石器が少なく、本遺跡の生産活動を考える上で問題である。特に前期初頭の2号住居址のあり方は特異な例といえよう。

第Ⅳ章 結 語

今回の調査は尾根状台地の先端を対象に行われ、台地頂部の中央部分よりやや西寄りと南側斜面の一部に、縄文時代後期前半の竪穴住居址と方形柱穴列、土坑群が環状に巡り、ある程度の集落を構成していたことが判明した。また、前期初頭の竪穴住居址と平安時代後半の竪穴住居址が単独で検出され、集落の規模は不明ではあるが、ある程度の規模を持つ集落址であることが判明した。

今回の調査により得られた縄文時代前期初頭の住居址は、八ヶ岳南西山麓では初所見のもので、山麓部の縄文時代前期初頭を考える上に重要なものである。特に住居址より検出された前期初頭の土器群は所謂中道式、中越式、自出不明の縄文系の3者より構成され、土器より見た場合多くの問題を含んでいるように見え、今後稿を改めて論究したい資料である。

今回調査した中ッ原A遺跡は、昨年より継続してきている、堀地区のある程度まとまった地域



第8図 第2・3号住居址出土の土器（1～29、第2号住居址・30～34、第3号住居址）
（20は1/6、他は1/3）

における考古学的調査であり、その成果は隣接する台地に位置する中ッ原B遺跡や珍部坂A・B遺跡、城遺跡、水尻遺跡などや、来年度発掘調査が計画されている立石遺跡などのあり方を総合的に踏まえて考察しなければならない問題を多々含んでいる。調査のまとめに変えて、今回の調査により得られた問題点をあげ、今後の課題としたい。まず第1に本遺跡における石器組成の貧弱さが指摘でき、周辺遺跡との相互関係の中で考える必要がある。縄文時代後期前半、平安時代後半の集落展開についても、南側に谷を隔てた位置に立地する立石遺跡、本遺跡のやや下方に位置した城遺跡にも同時期の遺構の存在が認められており、これらとの関係より本遺跡のあり方を検討する必要がある。今後これらの問題点について広域的な成果に基づいて考えなければならない。

今回の調査は、昨年に引き続き隣接する遺跡群のあり方について、新たな資料を提示することができたが、調査により得られた成果は単に1遺跡内だけの問題に留まらず、遺跡群を単位とした幅広い広域的なスケールの中で相互関係を考えなければならないことを再認識し、今回得られた多くの問題点はそうした立場に立って再考する必要がある。



第2号住居址全景



第3号住居址（南侧より）



第2号方形柱穴列（東側より）

中ッ原 A 遺跡

平成 4 年度県営圃場整備事業掘地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成 5 年 3 月 2 日 印刷

平成 5 年 3 月 10 日 発行

編集 長野県茅野市塚原 2 丁目 6 番地 1 号
発行 茅野市教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
